WASON
HQ
1104
J724+

Sept 1
1888
no 125

一冊五錢　　版權所有

當府内無郵税　　各土曜日出版

明治廿一年　(第百貳拾五號)　九月一日發

社説
理想の紳士(第一)

論説
クリスチアン、ホーム(内村鑑三)○妻君の資格(紅雨亭一枝)

批評
婦女子に關する雜誌の世の中(乎)(是空子)○近親結婚の害○雜評

叢話
ゲーテ、美人を評す○子供は大人に非ず○伉儷は鋏の如し○景色○一唱百歎○一事千金○太閤狐に一文を送る○百人一首一口話

小説
哲女の巻○さすがに双紙○小説神髄

佳傳
グラッドストン夫人

寄書
女學雜誌の寄書家諸君に告ぐ

新報

小供談

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 125. SEPTEMBER 1ST, 1888.

EDITORIAL:— The Ideal Beau (No I), The Gentleman and the Influence of Lady's Ideal.
LEADING ARTICLES:— Christian-Home: (No 1), by Mr. K Uchimura; True Character of Wife, by Koutei.
CRITICAL NOTES:— A World of Woman's Magazines; On Evil Effects of Mariages between Near Relatives; Miscellaneous Work.
MISCELLANIES:— Love and Intellect; How to Teach Children; Natural Scenery; Things Worth Knowing; Hideyoshi's Letter to a Fox; Man and Wife Compared to a Scissor.
NOVELS:— "Tetsujo no Maki;" "Sasugani (XI)" "Bouquet of Novels."
BIOGRAPHIES:— Mrs. Gradston
CHILDREN'S COLUMN.
GENERAL NEWS

通信女學の廣告

通信女學 第拾貳卷 發兌
去十五日出版せり
定價廿錢全國無郵稅 一冊枚數七十頁
蓋し最良の敎科書
婦人會員の會讀及月 内の學習に適せり

●珊瑚の珠 （第七十六回）

和歌を引て材藝ある人の箴を說く

勝とをこのむは人情の常、まされるをにくむは人慾のつねなりこの故に材藝ある人はなほ愼むべし木林を出づれば風かならず折るといへり近頃材智は身讎と云ふこゝろを中院通躬卿の御歌とてうけたまはり侍りし。

人に見よおのかえおらぬ花の香にをりつくさるゝ梅の下枝。（梅園叢書）

物每に一得一失の理ありといふ說

金は天下の至寶なりこれを貯ゆるものは家富ありされど是によりて身を失ふ者あり人參黃蓍は藥の隨一なりされどもこれを服して命をおとすものあり劍術兵法は身を衛るものありされど是によりて身を殺すものあり醫術は人を救ふものなりされど是によりて人をころすことあり飲食は生を養ふものなりされど是によりて我躰をやぶる事あり國の大臣は國を治むべき者なりされどこれによりて國を亂るものあり此のさかひ能く〳〵工夫すべし。（同上）

水戸に在て梅花に歌を添て呈する者あり其返しよ

源　烈　公

冬籠りよしや春べに咲かずとも知る人ぞ知れ庭の梅ケ枝。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第百廿五號 明治二十一年九月一日發兌

社説

○理想の紳士

（第一）、紳士及び婦人の理想。

無躾ながら拙なき文もて一筆しめし上まゐらせ候、兼て女學雜誌を頂戴し、曾ては理想之佳人と云へる最と面白き御社説を拜讀して、其頃より思ひ切まり候一事、申上るも甚はだ愧かわしく候へども、兎も角御聞に達して、お考を伺ひ、妾等後學の教へと致したく、扨は無禮なる事と存じ乍ら、强ひて取とめなき縲言をば申述候。理想之佳人の初めに、

呉王劍客を好めば百性に瘢瘡多く、楚王細腰を好めば宮中餓死多し、アイノの女唇に入れ墨するも、舞蹈館の貴婦人洋蜂の腰となるも、漢王天下の父母の娘悉とく揚家の女めたらんと欲し、京中の白柏子我も我もと妓女たらんことを羨やむが如き、皆是れ外に要むる所の者あつて、内に之に應ずるが故なり。即はち、一般に理想せられたる佳人の品格茲に一定して、天下の婦女即はち斯の如き佳人たらんことを理想し、理想、理想を追ふて、畫像の人物躍然として活動す、於此乎、無形裏に造られたる新粧の佳人は、終に笑つて當代の揚妃光姫と爲る也。

との御論あり、實に尤もの御事とつねぐ〜評致し居候。承はるに、昔し元龜天正の頃ほひには、男は四尺八寸の大刀をかざし、女は長刀を小腋にかひこみ、いざ鎌倉と云はゞ直ぐみも討つて出で、君が陣頭馬前に骨をさらすを此上なき譽れと存じ候ひしよし、其頃には男も女も皆あかゝる雄々しき武士または其妻と成りたく念願いたしつらん、此れ其人々の理想と申すべきものか、斯て此の理想いよ〜〜强くして、隨ひて斯る勇々しき御方々が多く出で來り候と聞及びぬ。其後德川舊幕の時世と爲りては、世の太平につれて學問大層に流行し、女は遊妓香茶花の藝を嗜しみ、斯る優しき心得あるが世間にも持て囃さるゝよう相成候まゝ、扨ては殿方には學問を一心に御勉强になり、婦人方は鳴物遊藝に堪能たらんと、只管ら勵まるゝ趣きに變はりたるよし、妾わの祖母などが毎度話し呉れ候、是又た彼の理想一變して、附て男も女も別途に骨を折らるゝことゝ成りたるにや候半。右ように考へ續け候へば、いよ〜〜以て御說の味ひを感じ、益々其の面白味を悟り有りがたく御禮申候。之れに付き尙ほ思ひ切まり候一事とは

、矢張同じき理想之佳人の終りに、
左らば則ち今日、此の今日は、諸君が先祖傳來の理想を放擲して、更らに開化したる一新の理想を立てらるべきの時に非ずや。諸君請ふ聞し召せ、昔し天孫海神を禱り玉へば、乙姬忽焉として出現しまします、葉公龍を好めば、龍も亦天井より顏を出せり、諸君もし眞とに極美の佳人を理想せば、極美の佳人、豈に天の一方より降生することなからん哉。
と御勸めになりたるお言葉、もしも殿方が理想によりて左樣に美しき佳人が乍まち出現いたし候とならば、妾等女の輩らよて若し相應の理想を打立候半には、世の中に尙更らに立派なる紳士方が出現し玉ふの一助とも相成候べくやと、斯樣に思ひ出して、獨り心を苦しめたることに侍る。

物の本にて學び候には、中古歐羅巴の國々よは、シバルリーとやら申す、武士の一流あり、幼年の頃より婦人方に接近し、其が愛護を受けて人と成りたるの故に候か、もしくは其比ろ惣べての時勢に由りたるの故に候か、たゞ〳〵婦人方の心に適なひ、其の好みに應ずるとのみを專ばらにして、之が爲めには、血を流し骨を挫くをだも厭はざりしは物かは、折に觸れては之が爲めに生命をも棄てゝ、反りて之を大ひなる譽れと思ひたるよし、物躰なきほどの事に候へども、必竟は當時の士らひ方が、主として婦人方の好みに適せんと成され候よりの成果ぞと考へ候。左れば、此の中古の氣風今に殘りて、彼のゼントルマンシップとやら申すものと相成り、ゼントルマン即はち紳士とは、能く女に優しくして、一方には恐れなく强きを挫ぢき、廉潔高尙の士らひ氣を有つものを云ふとか聞及び候、そして此の紳士も、今の婦人方の好みに適せんとして、なか〳〵に其行ひを愼しまるゝ節の候よし、每度洋行したる親戚のものより承はり候。夫のみかは、獨逸にては、大學の學生が大層に果し合ひを好み、何事かと申せば小刀を折振り、直ぐと互ひに勝負を爭そひ候よし、開けたる彼國にて何故左樣野蠻なる行ひのあるものやと疑惑いたし候へば、之は其地の女方が此の果し合ひを贊成し、學生がもし顏に一つ二つの傷を持つときは、殊の外評判せらるゝにより、何如にお上より此の行ひを禁ぜらるゝとも、今に少しも減じ申さぬとか承はり。尙又た、英吉利國の海軍が盛んにて、年若き男子の方々は、喜び勇んで其の水夫とならるゝよし、然るに其起りは、當國の婦人方が甚はだ海軍の人をひいきにして、士官は固より、凡そ一と度び水夫となりしものにても、大層に其

の受けが宜しきより、扨ては殿方の洋服まで、自然と海軍風のが流行するほどの勢ひと聞及び候。實に女は力の弱きものなれども、其髪の毛は能く大象をも引くとか申し候、昔しより今日まで、世上の殿方が斯く迄でに女の好みに應ぜんとして、其の堂々たる御行ひを變へさせ玉ふと承はりては、眞とや婦女子が打立つる理想は、紳士を出現せしめ參らするに多少の助けなきにも候はじと、嗚呼がましくも自から思ひ定めたる事に侍る。

萬一にも此の考への如く候はんには、世に立派なる紳士の出で來らるゝとは、多少妾等婦人供の力にも由ると申すべく、左候はゞ、丁度其の反對にて、世に忌々しき似而非紳士現はれ出て、彼の雄々しき士らひ氣の廢たり候ふともあらば、此は又た幾分か婦人供の過ちに由ると存じ候。昔しより英雄豪傑の母は必らず賢母にして、其が大事業を成し遂げたるには、必らず亦た賢夫人の內助ありと申し傳へ候、即はち此れ其の賢こき母又は妻たる婦人の理想立派なるゆへ、此の立派なる理想が實際に立現はれて、遂に彼のすぐれ人を出し、又た此のすぐれ人に大なる手柄をも成させたる事と存じ候」。左候はゞ、妾等ふつゝかなれども、何卒かゝる賢母賢夫人の理想を習らひ、世に珍らしき紳士を出現せしめ參らするよう盡力いたしたく、過たる申分のようなれども密かに覺悟いたし候」。然るに之とは打つて變はり、彼のお世辭の上手なる、踏舞交際のお上手なる殿方、又は巧みに英語をお談し遊ばし、數多の小說を暗らんじ玉ひ、瑣々たる隨筆様の逸事を多く覺へ玉ひて、只管ら女原の會話に苦心なさるゝ殿方、又たは、モーニンコートの仕立當世風にて、頸には弱氣たる赤の飾りを着け、お目は確かなるに特更ら水晶の目鏡を掛け、純金にてありやなしやは知らねど、白のチョッキに蟠かまつたる金ぐさり、指に穿たれたる金のユビワ、もろともに大層に光を放ち、香水の香ひ鼻を衝く計りにて、お頭は二三本の垂れ毛の外か、かつらの如く華美に左右に分ち玉ふなど、只々浮たる女原の愛を引んと化粧さるゝ殿方など多く世に出で玉ひて、而して此等の殿方は、皆なそれ〲に婦女子の好みに應ぜん爲めの御處行とありては、妾等のふつゝかなる理想が此の御國に最と果敢なき男子を出生せしめたるの道理、申わけなき義にて、不忠此上なきことと空恐ろしく存じ侍る。

それゆへ妾等婦人どもが、何かと高慢なる理想を打立てゝ世に立派なる紳士を出さんなど、左様に途方もなき大望はゆめ

〳〵起し申さず。然し乍ら、もしも妾等の好みとする所が、幾分にても世の紳士方を造るに影響あるものと承はり候らへば、先づ以て、妾等が何如なる理想を定めてよろしきやを心得たく、夫が爲め思ひ切まりたる譯にて侍る。そもや何如なる紳士が眞のゼントルマンにて候か、一二の友人に問合せ候てもハキとしたる答へもなし、左らばとて去月米國にて催うされたる萬國婦人の大會を引つゞきて此の地にて催うし、愛すべき立派の殿方とは何如なる人ぞと、討論會を開くべき便りも之れなく、いろ〳〵に苦勞いたし候上、之こそ先生方の御說を承はるの外なきことと思ひつき候まゝ、扨ては前にも申述候よう、拙なき文して一筆申上候とに侍る。左に愚かしき繰言を加へ候は、嗚呼がましくも妾が理想とする紳士の資格を遠慮もなく書つゞりたるものに候、御覽の上は御破りすてねがひたく、たゞ〳〵理想之佳人同樣の御名說を伺ひ申したう、これのみ樂しみ暮らしまいらせ候かしく。

草の舍　ゆかり

女學雜誌記者先生の御許へ

「ソクラチース」氏市街に於て金滿家の令息に邂逅せしとき敬禮を爲せしに彼返禮を爲さずして而して去れり「ソクラチース」氏の友人之を聞き大に憤懣の色を顯はせり先生徐ろに之を止めて曰く彼れは吾よりも不敬なるのみ諸君何ぞ之を憤るに足らんや。

論說

○クリスチャン、ホーム

（米國理學士）内村鑑三　述　佃與次郎筆記

左は客月七日西部婦人矯風會の爲めに番町教會々堂に於て演說せられたるを佃氏か筆記せられしものなり。

今日は御婦人方の御依賴に因て、御婦人方に御話しするのです。今日演べます題は、クリスチャンホームと豫て掲げて置きましたが、何故に私は此クリスチャンホームと云ふ英語なりの題を申したかと云ふに、是れには少し譯がある。元と此ホームと云ふ言葉は我々日本の人が直に用ゐて居るのみならず、英語の外他に譯する事の出きぬ言葉だと申します、確か比斯馬克でした申しますに、英吉利には二ツの羨ましき言葉がある、其一ツはゼントルメン其一ツはホームと云ふ此二ツの辭だと申します、ゼントルメンと云ふ事は御承知の通り、日本の新聞などでは紳士と譯しますが、紳士と云へるとはゼントルメンと云の意味を十分の一も通ずるとは出來ません、是れと同じくホームと云ふ事を家庭などゝ譯します、併し家庭と云ふ譯はホームと云ふの意味を十分の一も通ずる事は出來ません、ソレ故に諸方の國々で何うかしてホームの宜しき譯を得たいものだと苦心して居りますが獨逸語の Heiman

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

Geburtsort. などの譯はホームの深意を示しません。ソレ故に英國のホームには如何なる意を含むか又其ものが我國に大切なるハ如何なる仔細であるかを諸君と共に攻究して見たいと思ひます。

扨ホームと云へば、先づ第一に故郷で無ければならぬ、生れし處、育ちし所であければならぬ、山や河や平原や又た朋友親戚が無ければホームでは無い、是れが第一のホームの原質です。第二の原質は其所に衣食住且つ生活の度が備りて居るのみならず、又親や兄弟の居るのみならず、爰に何と申して宜しいか分らんが、世の中にコヽ程好い所は無いコヽ程清く樂しき處は無い此世の中に此のホーム程大切なるものは無い此廣き世の中の畫圖を出して針の先でコヽに私のホームがある是れより外にイヽ所は無いと定むるとの出きる處是れが即ちホームの解說であらうと思ひます。然しながら外の事と違ひまして、ホームとは其國の憲法や其國の開化などの如く幾日話しても其中の眞味をお話しするとは出きません、唯我々が此ホームと云ふものに這入ッて其空氣を吸ひ其感化力に感じて初めて其ホームの眞味を味ふとが出きると思ひます、ソレ故に私は先づ一番に私の見て來たホームとは何の樣あものであるか何の樣に見へたかこれを今少しくお話し申ふします。

即ちホームのホームたるとは第一に其家の妻君即ち女王に在るとで御座います一家の中に二三人の小供があり夫があり其家の妻君は即ち女王で御座います、左れば其の家の妻君は日々の事を企てまして、先づ小供の着物の洗濯から仕立かた麵包の燒き方から下婢の使ひ方まで悉く己れが支配して居るのであります、故に好きホームに居れば、一番に驚きまする事は、朝から晩までの事渾て秩序あるとです、此ホームに宿りて居れば起る時から寢るまで時がチヤンと定ッて居る、朝六時にあれば下婢は鐘を打ちて家内を起すと孰でも皆起きなければならぬ、先づ家の妻君は眞先に起きて幾分間に顏を淨めなければならぬ幾分間に衣を着けなければあらぬ、何分の間に聖書を讀まなければならぬ、又七時とか八時とかになれば矢張鐘が鳴る、一同御飯を食べにゆく、ソレから少し話を爲して居とか隣室でオルガンを聞くとか其後三十分も立てば七時半か八時には主人は職工場に出るとか、母親は臺所に行き姉さんは何所妹は何所又其次の妹は學校に行くとか、皆各々の職に就ます、驚きまする事には若し姉が二階の掃除を受持

てば妹は決て之に構はぬ、自分のすべき仕事だけをハキ〳〵として仕舞ますソレ故に一家中の仕事はチャンと極ッて居るから朝六時より夜の十時に至るまで少も面倒なく、軋轢なく毎日々々の事は順序を追ふて運びます。

第二に、好きホームに往けば家は誠に奇麗です、然し必ずしも立派の敷物であると云ふのでハない、下婢も澤山下男も澤山と云ふ譯ではない、好きホームに居れば dust がたかつて居らない、小供の着物には垢がたかつて居らない、雑巾懸けも能く屆て居る、上り口から奥の隅までが其家の女王たる所の妻君の配下にあるから毎日々々極ッて奇麗になつて居るで御座います。

第三に好いホームに往けば、儉約で御座います、非常に儉約である、的を立て出すべき所には隨分寛大なる處置を以て立派に出しますが、出すべからざる所には好き家の妻君は一錢半錢を爭ひます。

第四に好きホームに往けば小供の教育が能く行屆て居ります小供の教育はモウ年が幾つになれば家に在て學校に行く下稽古をする、故に能きホームには幼稚園に用ゆる道具の十や十五は大抵供へて有ります、ソレで朝の九時に母親が皆家の掃除を終れば少さい子の學校が始まる、ソレが十一時頃まであつて晝過ぎになれば又二時間位家の學校が有ます、母親が學校に遣る前に、小學讀本は何まで覺へたか地理書は能く出きるや否やを尋ねます、又歸れば學んだ事を母が試驗します、ソレ故に其家の教育は實に能く行屆くから學校の先生は樂です、此點に於ては私共感心した、學校に出て三時間なり四時間あり教師に教を受けて家に歸りても母の教育が無くば縦令忘れて居らなくも必ず進歩が遲い、好きホームに教育を受けた人は朝に晩に母に下た讀をして貰うから他に比して二倍も三倍も進歩は早う御座います。(未完)

○妻君の資格 (其二)

紅雨亭　一枝　演舌

余は人間の義務として婦人を愛す人間の天性として婦人を好む而して余の最も好愛する所の婦人之を詳言すれは余か後來比翼連理の契を結び友白髪の末長く始終苦樂を共にせんとするの婦人は粋も無粋も噛み分けて色情哲學の親玉たる左褄の苦勞性米八仇吉其人を愛するに非らず又心未た悲まさるに目能く涙を灑き心未た喜はさるに口能く笑を呈し須臾に男子の鐵腸(眞の鐵腸に非らず)をして海鼠の如くならしめ朝に源君を送り夕に平旦那を迎え交際官の隊長たるざます流の苦勞

人高尾夕霧其人を愛するに非らず固より彼等多數の中には薄命可憐の紅裙も少なからざる可しと雖ども一たび婦徳を破り禽獸塲裡に徘徊し一は爪を隱くし一は尻尾を蔽ふて吾人男子を誑かさんとせり余 Frau großer freund なりと雖とも余は吾親愛なる婦女諸裙の爲に一臂の力を盡して之を社會の外に退去せしめんと欲する者なり然れとも彼の馬上刀を揮ひ孱弱の手能く關東の好男子をして失はしめたる巴御前及ひ養在深閨人未知天成麗質自難棄楊家の女の如きは是亦た余の苦樂を共にせんとするの婦人に非らず余の後來偕老同穴の盟を爲さんと欲するの婦人は獨り眞に文明の空氣を呼吸し眞に婦女たるとを得るの婦女諸裙に外ならず。

方今女子敎育の必要を感する者多く女學校あり女子敎育會あり女子奬勵會あり曰く何曰く何と到處女子敎育の談を聞かざるなし女子敎育の道亦た至れりと謂ふ可し然とも余竊に考ふるに方今の敎育固より文明器械的の婦女を養成するを得るならん此敎育法に依て養成せられたる婦人諸裙は「オルガン」の調にも長せらるゝならん舞蹈も御上手ならん英語もうまく話さるゝならん是誠に結構の事なり余は婦人諸裙に向つて唱歌會に於て流麗の曲を奏す可からず英語會に於て忠臣藏を演す可からずと曰はず然れとも是果して眞の文明の婦人と稱するを得可きか眞の婦人と謂を得るか余は之に答ふるに少しく躊躇せざる能はず蓋し今日女子敎育の目的たる女子の地位を進め男女同權の道に至らしむるに在り而して彼敎育家諸氏は男女同權の迷夢に誤られ其極や人工を以て機械力を以て婦人を改造して男子と爲さんとするの傾向なきか社會の基礎を危ふし人間の幸福を破壞せんとするの憂なきか啻々枝葉の生長を謀て根本の培養を忘たるに非ざるか請ふ試に之を論せん。

凡そ世界には優勝劣敗なる一大原則ありて生存競爭絕間なく優者は益々繁殖して劣者は漸く衰滅に歸するは爭ふ可からざるの論あり此弱肉强食の修羅塲に在つて勝を制し假令ひ勝を制せざるも相頡頑して己れの生存を保たんと欲せば必ず敵を防くに足るの利器を有せざる可からず而して其利器たるや獨り其全身の力を集めて其長する所を養成するに在り若し其長する所を捨てゝ其短なる所を以て敵に當らんとするは是何ぞ盜に糧を齎らすに異ならんや今男女の性情を審査するに神は必す男女兩性を同一躰に造りしものに非らず躰質の搆造より之を見るも容易に之を知るを得畢竟するに男子は社會の頭にして女子は其心なり男子は判斷力にして女子は感情なり男子

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

は活力にして女子は修飾なり慰なり男子の司る所は記臆にして女子の領は愛情なり其相異なる已に此の如し則ち其社會に生存するの道豈に同一にして可ならんや然るに今日の女子敎育は女子の首領たる心情を養成せずして其最も短にして男子最も長する所の腦力を培養して男子に抗せんとす抑も亦た誤れりと謂ふ可し是を以て高等の敎育を受けたりと稱する婦女中にハ却て女子特有の優柔温和の美德を抛ち務めて粗暴快濶の風を爲し其街頭を歩するや肩を聳し風を切り傲慢自得殆んど男子と化し去らんとし已れの盡す可き一大義務を捨てゝ政治上社會上に於て男子と競爭せんとする者なきにあらず此の如くにして止まずんバ終にハ女子にして劍を帶び銃を携へ兵役に從事せんとの妄想を起す者なきを保す可からず噫誰か烏の雌雄を知らん此の如き婦人の續々相踵で輩出するあらバ余ハ婦人の爲め男子の爲め且つ國家社會の爲めに大いに悲まざるを得ざるなり彼の歐米婦人の今日の勢力と地位とを有する所以のものは「オルガン」の調に長するか故に非らず舞蹈を能くするか故に非らず羅甸希臘語を知るか故に非らず只た婦人たるの美德即ち人の妻たり母たるの務を盡すが故なり有鬚輩をして愛敬の情を起さしむるが爲めなり我國今日の婦人ハ吾人青年をして眞に愛し眞に敬せしむるの感情を起さしむるか余輩ハ後來貴重なる責任を負ふ貴孃諸君の狀况を見て轉た失望の念胸裡に起るなき能ハず。（未完）

批評

○婦女子に關する雜誌の世の中（平）　是空子

前號にも述べたる如く、近來は女の雜誌滅相に殖えたり」。先づ、風雅優美なる「いらつめ」は、毎號怠りなく、新形流行の考へマッタお化粧お飾りの工夫を凝らし。貴女之友は、編輯人と社說の持論との毎々豹變するに拘ハらず、相變らずに家內經濟家內衛生の反譯をお掲げに成り。日本之女學は、此頃ろいよ〳〵抜萃がお上手と成り、而も編輯の躰裁大に整つて先は八百屋の店に仕切が出來たる如く。女新聞は、中々の御勉强にて、小說臺帳點取文等それ〳〵に趣向淺からぬ趣むき。一流變つたる婦人敎育雜誌並に婦人敎會雜誌の二つは、素と是れ佛敎徒の慈善心に成るが故に、甚だ着實温厚にして有がたき善女を作てすには屈强の案內たるべく、更らに一變したる東京婦人矯風雜誌並びに大日本婦人衛生會雜誌の二つは、矯風及び衛生と云へる二事業に對しては、實に莫大の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

働らきを爲しつゝあるものと云ふべし。」而して斯る堂々たる數多の雜誌に介まれ、左右前後より除物よさるゝ女學雜誌なるものは、中々以て皆樣方のお仲間に入るべき輩にあらず。但だ、女學新誌、女學叢誌、男女勸學新誌、女子職業新誌、などが知らぬ間に消え失せらるゝの際、獨り剛情に生存らへたるの好みを以て、扨てこそ今日隆盛の時運、女權太平の御世にも會ひつる嬉しさ、隨喜の涙止めがたく候。老人の狂言固より採るに取らねど、女學雜誌あれば老婆の心意氣を以て、一と通りお若い衆に申す條々暫時嫌がらずにお聞下され。抑も今日只今は、中々婦女子の雜誌が行わるべき、時節ありとは存じ申さず、世上の評判は如何に矢釜しくとも、女論は何れ程繁昌すとも、雜誌を讀まるゝ御婦人方は、現今眞とに少數にて候、左らば如何なる才筆を揮るひ、如何ある妙工夫を盡して雜誌を編輯せらるゝとも、中々以て國民の友位ひにだに賣れる氣遣なし、之は確かに受合申す。夫故え、諸君の如き高尚潔白なる目的にて雜誌を發行せらるゝには、雜誌が賣れずして困難さるゝは固よりお覺悟の事なれども、之れより後ち、萬一には評判外形を當てにして、多少モウケ主義にて婦人雜誌を發行さるゝ者もあらば、遺憾乍ら他日女文學史に快よからぬ紀事を遺すの決果を生じ候はん。承はれば才子の面々、アチにもコチにも、五六人は新女學雜誌の御計畫あるよし、少さか時勢を存ずるに付之を喜びも致さず、少と老婆心に心配して、詰らぬ述懷を、斯の如し。

○近時の女學論

（一）近親結婚の害

去廿五日發兌、東洋學藝雜誌第八十三號に掲けたる、石川千代松氏の近親結婚の害一篇は、甚はだ有益なる論文と見受。先づ、植物動物の中には一躰中の雌雄が成るべく交合を避けんとする工夫の最と面白く備わり居ることを説き、次に萬物に進化退化あり決局其現地位に尤も相應するように變化しゆくの理を説き、次に形質遺傳の理に付てダルヰンのパンゼネセス説及びチグリー氏のイヂヲプラスマの説を略述して扨て、種々の單細胞多細胞の生物に付き其の分生の工合によりて遺傳及び新化の關係を證し、最後に云く、

偖て近親結婚と云ふものは如何あるものやと問ふに近親のものゝ生殖細胞核絲は其形質自ら相似たるものなれば是が合一するときは自ら生ずる所の子孫の生殖細胞核絲中に變異少なかるべし、故に外界に對し自然陶汰の働く所少け

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

れば若し新なる外界に逢ふたるときに之れに相應して化して行く力が少き理なり、外界に應ずるの力少きときは自然陶汰にてヅン〳〵取除けられ遂には其種の滅亡をも來すものなり、譬へば大洋の眞中の一小島に住し、外界の異少き處に生じたるものは新ある外界に逢ふと之れに應化すると出來す種類の立消すると少からす、之れとても生物が別に求めてコゥなりたるにあらず昔より之れに對する外界の異少かりしか故に近き血縁のものどうしの交合より出來其生殖細胞核絲中に餘り異りたるプラズマを有せざるものも遠き血類のものゝ交合より生し多く異りたるプラズマを有するものも皆同く生存し別に生存競爭上に於て勝敗も無ければ共々に生存し共々に交合し其種の全躰に取りては生殖細胞核絲の變化少く從て種の内に變種少き理なり。

然れども今日此地球上に居る生物は幾等年を經て始終雌雄交合し其生殖細胞核絲中には充分異りたるプラズマを俱へ且つ前に申したる如く一生物が生ずる卵も第二極球にて各〳〵異りたる核絲プラズマを有する樣になりて居れば今が今親屬中にて結婚をして害あると云ふとはなし、反て宜しきものもあるべし、然し一種生物の全躰に取り、其生物が外界に對するとに取りて考ると近親結婚と云ふものは害あるものなるべし、しかのみあらず此込入たる社界に生し此込入たる外界中にコーシテ居る者は往昔より自然陶汰に依り近き血縁のものと結婚せざりし樣あるものゝ孫裔にして我の内に既に近き血類のものと婚姻せさる樣なる下地あるものなるべし。

大略右の如し、諸ろの推理を包容さる、敬服と云ふべし。而して吾人は別に思ふとあり、抑も精と卵とは兩極の端を云ふものにして、其の相合するは、卵の生氣を攪動し警醒するの効あるに由るとせば、可成く近からざるものゝ結婚したるとき、其の産子の丈夫なるは當然と云ふべし。

雜評

一。實用學校管理法(一册)　多田房之輔著　東京教育社發行

論理の可否は兎に角、斯迄で經驗を基ひとして信切に、學校管理法を述べたるものは、近來の著作に頻多からず、凡そ教育に任ずるもの若し之を一讀せば、大に思當り、利益する所ろ少からじ、(五十錢)。

二。怜悧小談(一册)　鍋島忠之纂譯　東京辻岡金松堂

一寸と怜悧に、怜悧的の小談を編輯したるものにて、半ばは近時流行の頓智談に似、半ばは禪宗小僧の問答に似たり、夏季のなぐさみには多少の味あるべし、(二十錢)。

三。處世の物種(一册)　根岸兎三郎著　東京江島伊兵衛

何くれとなく、面白げなる物種を所々より集め來り、合計一百〇九件の隨筆を作

りたるものなり。叢〳〵處世の種と云へんよりへ、お談〳〵の種とするに宜し〳〵（廿四錢）。

四　日本歷史（三册）　山縣悌三郎著　東京學海指針社

小學校用日本歷史に眞著作の乏しきは、吾も人も尤も遺念に思ふ所ろなりしが、山縣氏の此著は逸早く出來て、而も編纂の躰、簡固包括、宜しきを得たるが如し、（八十六錢）。

五　東京名勝書詞（二册）　増山守正編　東京　小林八郞

曩に東京名勝詩集を編せられたる、増山氏は、今度又た此書を著わされたり、東都の風景は、君に負ふ所ろ莫大なりと云ふべし。名勝名地の詣はまた名手の手に成り、其の詞はまた高宗の韻に成る、三美併せ得て、天人相ひ華京の絕勝を示すものゝ如し、文人畫家一覽を試むべし、（六十錢）。

高砂の浦山國を隔て住といふはいかなる事やらん。うたての仰せ候や山川萬里を隔つれども互に通ふ心づかひの妹脊の道は遠からず、先案しても御覽せよ高砂住の江松は非情のものたにも相生の名はあるぞかしまして生ある人として年久しくも住吉よりかよひ馴たる尉と祖母は松もろともに此年まで相生の夫婦と成ものを。

叢話

○ゲーテ、美人を評す

獨逸の詩仙ゲーテ、美人を評して曰く、余は年若き女子を見て其の才智を取除きたる外の惣べてを愛慕するあり、即はち彼が容顔の美しき事、彼れが年若き事、彼が人を迷はすの媚に富む事、彼れが移り氣なる所ろ、彼れが過ちある所ろ、彼が眞率にして味ある所ろ、及び皇天獨り之を知ろし召して余自ら何とも言現はしがたき所ろのものをば愛慕する也、然も彼が才智を愛するとあたはず、固より其才智あり怜悧なるを見ては余は之れを尊敬すべし、之れ彼が一得あらん、然れども其の才智あるとが余の愛情を聳動し、以て余をして甚はだ温たゝかに感ぜしむるとはあたはずと」、情詩人の一評也。

○子供は大人に非ず

子供は大人でない、夫故子供を育つる母親は、能く子供の子供たるとを承知して敎育せねば、效能が無いです。兎角子供は、親の顔色を見て悟る斗り、其見へぬ心の中に何如なるとがありやは中々悟り得ぬ所である。由て子供が善きとを爲たらば、母親は喜びを顔に現はして強く之を賞むべし、若又悪しきとを爲たらば、悲しき樣姿を強く顔に現はして之を叱るべし、其の善悪に賞罰のあるとを、初より最と明白に心得さするが第一大切の事なり。而して之を叱るには、母親がイヤなる顔附をして、常の如く可愛がつて見せぬが尤も宜しひ、打ち叩きたるは犬にこそ善けれ、人間の子には最良の罰であい、盖し子供心にも、つね〴〵可愛がらるゝ母親がイヤな顔をして、無言冷淡に爲さるゝ程、つらきとは無いです。

○伉儷は鋏の如し

西洋女子敎育の卒先家、シドチースミス曰く、夫婦は猶ほ鋏の如し、相結んで固く離れざるのみか、時に反對の方向に退

き行くとあらんと雖ども、他人若し其間に入れば、左右乍まち接近して之を切斷し去ると、」何卒斯ありたきと也。

○景　色

ラスキン曰く、景色を愛するものに惡人なしと、然し石川五右衛門は、雪景色を眺めて價千萬兩と云へり、故に女學子は曰く、景色を愛する時惡念なしと、嗚呼天地宇宙の現象の何如に美なるや。」近日殘暑尙ほ凌ぎがたしと雖ども、朝に早く起出でゝ見れば、凉しき風最と心地よく吹いて、天に一雲なし、夕べには月太空に流れ、樹影、地に風雅ある畵を引いて、上下相應ず。獨り此間だに立つて靜に想へば、吾は之れ何如に快ろよき人間なるよな、氣韻澄み渡り、心志高く改まる、名利貪富は殆んど塵芥の如し。請ふ天下の女性よ、終日の家の務めもすでに終らば、先づ團扇を執つて庭前に出て、月に指ざして其の淸きを見よ、風に扇がれて其の凉しきを取れよ。

○一唱百歎

白　樂　天

辭其儀にてはなし、いで目前の景色を詩に作て、聞せう。承候。

靑苔負レ衣掛二巖肩一、　白雲似レ帶廻二山腰一。

心得たるか。漁翁のこたへに、面白や日本の歌も唯是に候。

苔衣きたる巖はさもなくて衣きぬ山は帶をする哉

小野寺十内

今は早言の葉草もなかりけり何の爲めとて露結ぶらん

熊澤蕃山

憂き事の尙其上に積れかし限りある身のこゝろ試さん

○一事千金

黑絹を新らしくする法　其穢れたるを冷たき茶又はコフヒーに少し砂糖を混ぜたるものゝ中にて洗ひ之を搾らず其儘に乾かすべし且つ餘まりハゲたるときは少々西洋インキを混じて洗ふもよし斯て乾きたるとき穢れたる方の表てにコテを當つべし。

油のシミを取り去る法　硼砂を湯五合に付七匁ほどの割にて混じ之に衣を浸すべし。

葡萄を蓄へる法　葡萄を久しく貯ふるには餘り熟し過たるを取去り程好きもの耳を殘し房の儘にて綿に包み冷しき室内に置くべし。

氷菓物の製法　林檎、梨子、桃、何れにてもよろし之をチロンにて細かにおろし砂糖を入れて甘くし扨て氷にて之を冷や

して少し凍らせたるを氷菓物と云ふ實に味よきもの也。

○太閤、狐に文を送る

太閤秀吉、東山稻荷へ送りたる書狀の文言に云く、

其方支配の野干秀吉召仕の女房に取附爲腦候如何の遺恨にて成其謍候哉其儀被聞屆可被申候其子細なく候はゞ早々可被引取候猶於延引日本國中の狐狩申付べく候委細の儀は吉田神主口上申含候恐々不宣

三月十七日　秀吉太閤

稻荷大明神殿

○百人一首一口話（第十四回）

鈴木弘恭講　八木鶴二錄

河原左大臣

みちのくのしのぶもぢずり誰ゆゑに亂れそめにし我ならなくに。

此の歌は。古今集にのせてありて。題知らずとある戀の部の歌でありますが。古今集にハみだれんとおもふとあります○みちのくハ陸奥之○しのぶもぢずりとは。奥州信夫郡の名産にて忍草を紋に摺りたる綿布をしのぶもぢずりといふ之。もぢハみだしの約言であります。さてみぢをもぢといふハ。もどろとみだら同言なればかくもいふのでありま

す。則ち下のみだれといふ序にいひなしたるにて。みだしずりのみだれとかゝりたる語路にて。一二の句には別に意ハありません○我ならなくには。我ならぬにといふと之。ぬくはぬの延言なれば。なくを約むればぬとなる之。にハ副詞のにてそへていふまでにて別に意なし○一首の意は。みちのくのしのぶもぢずりの如く我が心の亂れしは。誰ゆゑに亂れ初にしあらん。我心から亂れたのではないのに。ゆゑてみれば誰ゆゑではないやはり君ゆゑに亂れたのである。といひで戀しき君におくれる歌であります。また古今集の如く。みだれんと思ふ我ならなくにとする時ハ少し意も異りますが。大意は同じとであります○語格は。一段切れの歌にて。三の句の誰ゆゑにのたれが指辭にて。四の句のにしにて切れました。五の句の我ならなくにハ例の上へうちかへして意を強むる格之。又たれといふ指辭は。ぞやかの何などいふ何と同種類の指辭であります。

私は目が一つあれども見へませぬ、然し其目は私が何を致すにも無くてならぬもので、元來才智はありませんが隨分に鋭いと人さまは評判なされ、別に感覺も御座いませんのに中々光つて居ると仰しやる、然しおかげには或方樣の御なぐさみともなり、又或方樣の職業の御助けをいたし、隨分お役には立つて居ると存じます」と申すものはナアーニ。……針

小説

○哲女の卷　月の舍　忍

第二章、藤裏葉。(下)

此に至り學士は奮然として

イヱ、叔父さんが御留守ゆへに斯る事を申しますので、又近日お歸りと聞ますから、早く定たいと思ひましたのです」。

何んと仰しやいます、私は叔父の留守中に、決して其の樣なることを定ることは出來ません、一躰叔父は私が人と交際することを好ませんので、卿と斯うお附合申すことなどは、定めし不承知と存じますが、歸りました上は、私共の交際が何のようなることより初まりまして、而して其交際の爲に何のような利益を得たかを話しましたら、定めし左樣腹も立てますまい、却つて此後の交際を喜んで吳れるかと信じて居りまするが、仰しやるやうなることを定めまするに、私は叔父の留守中に、而して叔父の許し…承諾も得ずに、するとは出來ません」。

卿が夫程に、叔父御をお信じなさるは、情に於ては宜しひとですが、私は實に卿の爲に危ぶみます、卿は叔父御の人と爲を御存知でせう、…實に僞善者です。

春日さん」、一聲鋭どく飛び來れり。

春日さん、叔父は私の爲の父、保護者、教師です、如何よ卿を信じ、卿を愛するとも、叔父をお譏りなさることに對しては實に立腹いたします、叔父は學者で御座います、冷淡かは知りません、然し信切なる叔父で、私の只の一人の親戚で、又只の一人の家族で御座います」。

左樣思ひなすつてるを、今一々辨駁する必要もありませんから止めますが、卿は、私が只だ人を讒謗することを爲すとはお考へなさりますまい、况して卿に眞實の幸福を與へる者を陷いれて、卿の幸福を殺ぐやうなことは致さないと信じて下さるでせう、若し夫丈をお信じ下さつたら、今日は別に申しません、叔父御に對しなさるお考と、友人として私に對するお考が、兩立し得ますれば幸わいです、然し何日かは更に精しく申ませう。四條さん、今日は、私は、一物も得ずして歸ます、イエ私が持て參りました者を、其儘にして歸ます、何卒お心を惡るくせずに居つて下さい。夫ならば、友人として尤も熱心なる握手を…下さい、左樣ならば四條さん。

哲も立上つて纖手を差出し、固く手を握つて、

春日さん、友人として決してお忘れ下さいますな、叔父も

明日か明后日は歸りませう、其上で手紙を差上ます、何卒か居らして下さい、御丈夫に。

入口迄で送り出で、復たび握手し、

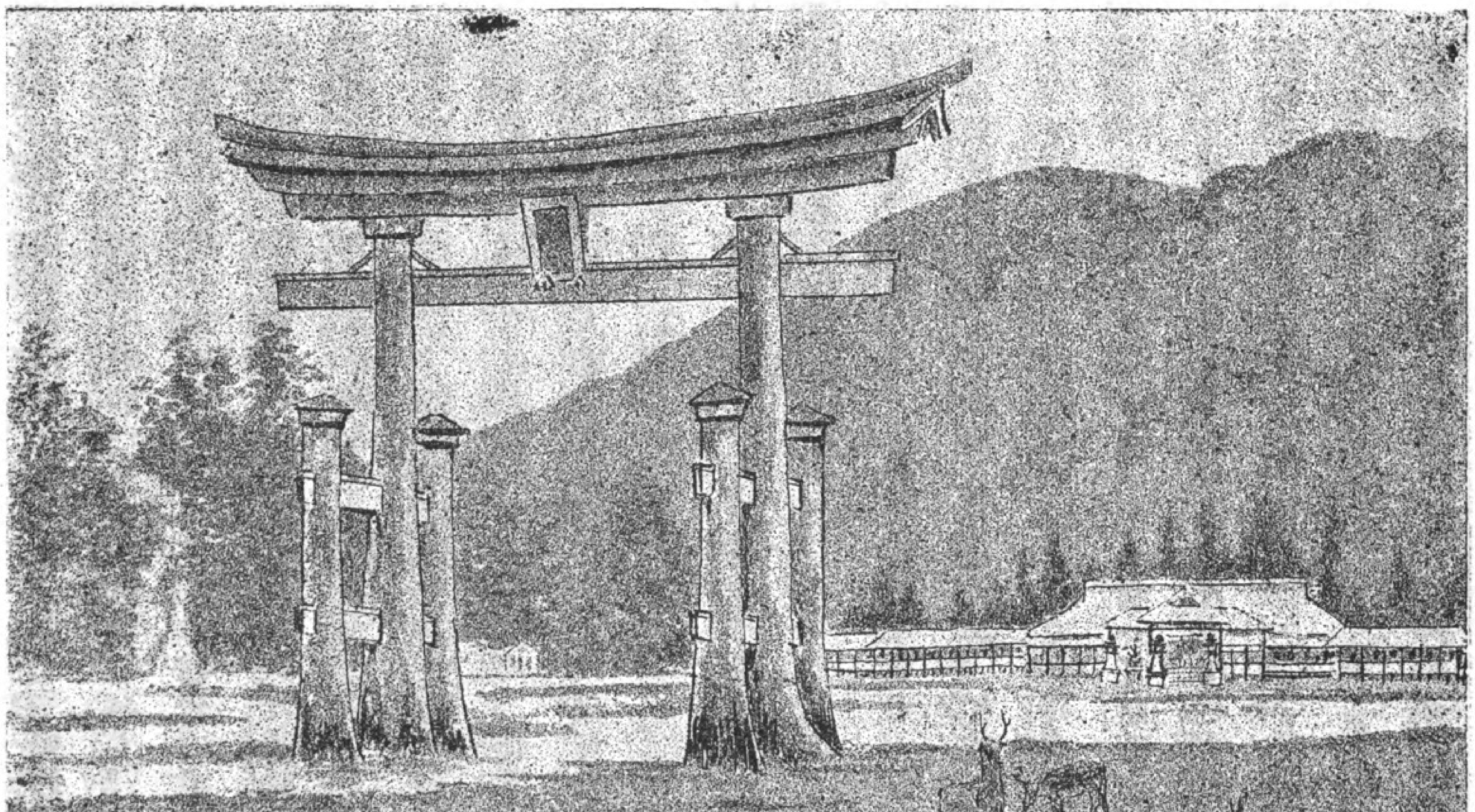
モゥお休みでせうが、何處へかお出でですか。

分りません。

叔父に相談しまして、若しも日光に參ると成りましたら、郎も御一處にお出でに成りませんか、お母さんをお連れなすつて。

サア何如しませう、何れ又…。

戸は閉ぢられたり、靴の音は遠ざかれり、哲はドゥと倒れて、ヨゝと泣きたるが、暫らくしてムックと起上り、急に戸を開けば、既に人影なし、急ぎ應接間に歸りて窓より彼向を望めば、田野青々として一面の緑座を敷くが如し、徑を行く春日剛は、力なげに天を打眺め、又立止まつて溝を打眺め、暫らく佇立して足下を睨まへたるが、又もや歩み出して其歩數を數ふるが如し、急かに此方を振り向きたれば、哲はハンケチーフ(手巾)を動かして遙かに招く、不幸にも彼れ近視眼にして知らず顔に、又力なく、彼方に向ふ、哲は手を叩けり、彼れ再たび振り向く、若し更に手を叩きたらんには歸り來る



べし、哲は乍ち思案して之を止めたり、彼また知らず貌に、但し不審らしく、彼方に向つて歩み出せり。

影の見ゆる限り見送つて、安樂椅子に打椅り乍ら、

あゝ吾が尤も信愛する友人よ、何如に汝ぢは眞實なる、何如に汝ぢは温愛ある。汝ぢと交わりてより初めて人間を知りたり、人間の尤も愉快なる動物たるとを知りたり、人間は皆な汝ぢの如きものか、左らば何故に人世に不愉快ありや、汝ぢが言語は一句一句に爽快を齎らして、吾が心を射るなり、汝ぢが目光り口動き正に其の心の深きより吾に思を現はし出すときは、吾が全身は、電氣に感じて振るひ動くが如くなるぞよ。吾が叔父は何故に吾に交際を嫌ひ玉ひし乎、交際によつて斯る幸福を得べしとせば、吾に之を嫌ひ玉へるは、叔父の愛なきに由る乎、然し叔父も亦自から世より絶ちたるを見れば、叔父は自ら交際を惡むが故に、吾にも亦た其惡むべきものを與へ玉はぬならん。然らば郎と吾との交際のみ斯る幸福あるか、然るか、左らば郎は尤も尊敬すべき人なり、吾は尤も幸福なる人なり、友人として此の幸福あり妻としては何如なる幸福ある者か、あゝ其幸福よ汝ぢ若し今先づ吾に其の顔を示すとを得ば、吾も亦た今に於て決する所ろあらんに。然し夫婦の交わりは朋友の交わりに何樣の附加へもある者なるべし、草木も動物も雌雄牝牡交際の爲に、花をかざり、毛をかざる、然しこれは只た其の種屬を増さん爲あり、吾只だ種屬を増さん爲の必要を以て人の妻と爲るとせば、吾は斷じて之を否なむ、斷じて之を否なむ、如此きは外に其人あるべし、吾に於ける天の命令は更らに其他にこそ在らん。嗚呼吾が友人よ、友人よ、汝は友人として吾を愛せよ、只だ友人として、吾が靈をのみ愛せよ、只だ友人として……。

ピラリと戸は開らひたり、だみ聲先づ聞えたり、而してのち頑陋らしき老婆の姿を見たり、

お孃さま、何をぐづ〱してお出なさるんだナア、明日はモウ旦那がお歸りじやありませんか、忙がしくつて忙がしくつて成りやしません、ちつと本でも片付て下さいな。

婆や、マア靜かにお仕な、今ま考へて居るんだから。

考へて居る、ヘン考るもないもんじや、大抵に仕ないと旦那にそう言ますよ、ヘン考へる……ヘン考るも……、あゝ忙がしくつて成りやしない……、八百屋さんかへ、今日はマア好よ……、考る……ヘン、……あゝ忙しくつて……チイ一寸とお待よ、八百

屋さん、テパ、八百屋さん。

鐵は其戸を閉ぢて、再たび椅子に倚り、

嗚呼。

○さすが双紙　第五篇(中)　美妙齋主人

それゆゑ時子は勿論時子の父親も非常に駭いて暫時は花房の顔と血の出て居る邊とを等分に見較べて居るばかりです。

「貴君どう爲さッたの？　栗殻さんは？　眼を圓くして時子が第一に息を推出しました。

「え、なに、どうも」……、脣に戰動を帶させてそは〳〵しながら答へました、「どうも爲ませんが、ね、山の笹に切られたので……今に歸ッて來ましやうよ、栗殻も」。

此時まで父親は默ッて二人の應答を聞いて居ましたが、此處に至つて始めて口を開きました。

「まア、しかし、花房さん……どうも貴君の顔色が……斯うぢやありませんか、栗殻さんと喧嘩でも爲さッたのぢやア。大變に顔色が青うムいますよ、ねエ、阿時」。

「さうですねエ、阿父さん、」更に眉を寄せて花房の方を向き、「あなた、左樣でしやう？　え、喧嘩なさッたの？」

圖星を指された尋問に花房も挨拶が出來なくなりました。

「大人氣ない喧嘩など爲たと言つては小兒らしい男だともは思はれは爲ないか知らん、氣の狹い男だと卑まれは爲ないか知らん。けれど既に悟られて居る。隱しても隱し切れず……早速に紛らす手段も無く……」

心で色々な考案の車を回轉させれば倏忽に今爲て來た事が想像と爲つて早くも出現し、それを思つて居る間に快一分時ぐらゐは過ぎて行く、その間の顔色はつまり胸中の寫眞となつて此頃の雜誌の表紙同樣、赤くなつたり、青くなつたりします。

「いつそ言つて仕舞はうか知らん。さぞ吃驚するだらうなア。左樣かと言つて斯如大概悟つて居られては……言つて仕舞はうか、やつぱり言はずに隱して仕舞はうか。何と言つて虛言を吐いたら十分に胡麻化せるだらう。矢張笑つて宜加減な事を言つて……嗚呼その方がまづ安全な策らしい」。

鞭が當れば馬も駛る。分別が既に固まれば顔色も暫時は和ぎます。それとも知らぬ堀父子は他視もふらず眸を凝らして花房の顔を瞻詰めれば（そして其心には今に喧嘩したと言ふだらうと豫め思料つて居て）……はて不思議……花房の顔の蒼味

は全く無くもなりませんが、しかし此時に出さうも無い、すなはち平生心のたのしい時に出さうな笑顔が思の外にその顔に現れましたので時子たち父子二人も有繋に再度の不審に心を取拖られました。

「なにも貴君方、そンなに御疑ひなさるにも及びませんよ」、さも落付いたと言ふ躰で茶碗を引寄せて茶を啣乾し、「本當は斯うなンです、駒ヶ嶽で、ねェ・・・今考へると馬鹿々々しいンですが・・・・不圖栗殻と・・・喧嘩ぢやァ無いのですよ・・戯に相撲を取ッた處が竹藪の中へ轉落ちまして」・・・・

ト聞くや否や幾分か堀父子も信を置いて來たと見えて父親からは「はゝァ、それは」、時子からは「あら、まァ」の返辭が同時に出て來ましたので花房の氣もまた進んで來ました、

「それから二人も吃驚して摑合ッた手を弛め、大笑に爲りましたが・・大笑になりましたが・・・・えゝと、其處へ栗殻の・・・何んでも栗殻の舊友らしい男が(是も漫遊に來て居るさうです)來懸ッて、それから栗殻は小生に別れて其男とまた連立ッて駒ヶ嶽の方へ尙登ッて行きましたから小生だけ一人で歸ッて來のです。そこで馬鹿な惡戯を爲たので此邊が些痛くて」、腰を撫でゝ反却り、「顔色が惡う御座いましたかねェ」。

如何にも口の利樣と云ひ、顔にあらはれた笑貌と云ひ、さすが心が紛雜して居るやうにも見えませんので慧眼の堀父子もやうやく疑念を晴らしました。それから話は四方山の事に移り、二三時間は皆々勝手な事を饒舌ッて居ましたけれど、しかし栗殻はどうしたのか歸つても來ず、宿屋の下女さへ栗殻が居ないのに心注いて堀父子と花房とに「栗殻さんは?」と尋ねるやうに爲りました。

此日急に花房は函根に居るのも快飽きたといふ趣でそろそろ歸京しやうと言出しました。元より時子父子の者は花房より前に此處へ遊びに來て居たことゆゑ、花房が歸らうと言出ては異存なく其意に贊成しました、遂に贊成があンまりよく行はれて「そンなら今日直に歸らうぢやァありませんか」と手短に話がまとまッて仕舞ひました。話が纒まるや否や花房の威勢の鋭いことゝ言ッたらそれは〳〵、言語に絶えて居ます。まず手荷物を片付ける、その處置の俄に敏捷になッたこと、見る間に我身のを調へて仕舞ッて堀父子のにも手傳ひます。「花房さん、宿の婦人に祝儀をやりましやうねェ」。「えゝ、それは最う遣りました」。「花房さんビールの空瓶は?」「えゝ、もウ宿屋へ呉れてやりました」。

どうしても斯う俄に花房が急出した撿梅、尋常の仔細ではありません。 早晩に花房たちの同行四人は登りの滊車に乘ッて居ます。 そこで同じ滊車の中に堀父子の知己が乘ッて居ましたので父子はそれとも會話をはじめた、それを機會に花房の胸の中に蟠ッて居た一種の念慮はそろ／＼巢を這出して次第に心を蠶食します。

「どうも困ッたことを爲たッけなァ…つまらぬ争から…あの後どう爲ッたらう、死んだか知らん。 もし死んだら何時か一度は露顯するだらう。死なゝいければ何も論は無いけれど…歸りがけに出遇ッた百姓、渠奴始終の樣子でも見て居たのか知れない、乃公の顔をじッと視て…振返ッて見たら先方でも振返ッて見て居て…渠奴事實を知ッて訴出なければ宜いがなァ」。

「ねェ、花房さん」、 突然に聲を掛けたのは時子の父親で花房を瞻詰めて微笑を帶び、 「先刻から花房さんと言ッて居ますのに」…

駭かされては流石に狼狽へ、何も目的は無くて前後をふりかへり、

「はァ左樣でしたか、つひすこし…そして御用は何ですね？」

さも間が拔けたといふ光景ゆゑ同じ滊車中の乘合も思はず眼元と口元とに笑を含んで見て居ると、殊に堀父子と話をして居た人は穴の明くほど花房の顔を眺めて而もにや／＼して居ます。

「ねェ花房さん」、 時子の父親は何氣なく更に花房に問ひました、「栗殼さんはまだ歸りませんでしたねェ？」

「はァ」、 澁々と對へました。

「この方は、もし花房さん」、 言ッて父親はその知己といふ人を花房に紹介し、「この方は栗殼さんに急用があるとの趣で是から又出直して函根へ入らッしやるといふ事です」。

何心無い辨明も脛に疵持つ身の胸には栗殼の名を聞くと均しく、殊に栗殼の知己に親接すると同時にさながら電氣に撲たれたやうに憶はず眼に弓を張らせて息を内へ吸込みます。

✦　✦　✦　✦

○小說神髓

蘇格氏著　ケチルヲルス　（第二十七回）

レスター侯は其の內室に退ぞき切りに案ずバーチー傍らに侍べる侯は數多ある殿上人の間だより其の味方と爲るべき人々

の姓名を數へ極めて細やかなる書附を作りよし〳〵之丈けあらば先づは大丈夫なり我父も我祖父も若し我の如くに用心して后ちに事を謀りたらんには彼の不幸はあらざりしものを用意輕卒にして遂に彼の如く首切らるゝに至りたり、と少さか誇り貌に見へたるをバーチー只だ首べを垂れて悲痛の趣きを示す。レスター侯之に云つて曰く汝ぢ左樣に憂ふ可らず我の如く根を張りたる大木が輕々しく一朝にして倒るゝと思ふやバーチー！尙ほ悲しび哉と呼んで歎息すレスター侯更らに云く汝ぢ此度勳爵士の位を得たれば今こそ我を助けて大に力を盡し呉れべき筈なるに此期に至つて卑怯未練の申條かな若し我を危ふく思はゞ只今より遠慮なく去つて思ふ方に行くべしバーチー此に至て漸やく首を擧げ君公の如く自ら信じ玉ふは惡しきとにあらねど抑も今日朝廷の間だに於て君に歸服し君に臣從するものゝ多きは元來陛下の御寵愛君に淺からず威權國内に並らびなきの故にこそ候はん喩へば彼の月光を御覽ある如し太陽と云へる日輪ありて其光を受ればこそ月は斯樣に皎々と照り渡るにて候はん君にして今一朝陛下に背むきて旗を擧げ玉はんには先きに忠實無二と思し召したる君が御味方は多分すでに君に矢を引く所ろの敵と相成るべし此儀深く御覺悟あらんとの願はしゝと申すにレスター大ひに嗟歎し成程汝ぢが氣付の如きともあらん然し余れと雖ども左樣やみ〳〵と打倒さるゝものにあらず思ふに后ろには恥辱あり前には亡びあらんに但だ今のまゝに止るべきにあらず早速に用意して我が軍兵を何時にても召集するとの出來るやうに致せ而して陛下の近衞兵を解散して密かに物の役に立たぬやうに取計ふ可しなど今は殆んど亂暴の勇氣に驅られて大胆に決心したり。

バーチーつく〴〵と考へ斯く相成候ては最早かくすとを得ず今日迄は何如にもして包み申さんと存ぜしが御主人の一大事と存じては今こそ明白に事實を申上ぐべし抑も陛下と君との御間柄に關する只今の困難と云へば元と君の御婚姻の事件によりて起りしには候はずや、何如にも左樣にて候はん成程世の中には一つの寶石を得んとして他の万物を擲うつとも候へども此の万物を擲うつに先だちては先づその望む所ろの寶石は眞に純粹の品なりや毫もキヅ欠點等のなきものありやと吟味すると大切に候はん左れば私が只今申上ねば成らぬと覺悟したるは彼のエメ夫人の事なりたとひ君が御怒に觸れて手打にせらるゝとも最早明言いたさねば成らぬ時となれり、レスター侯曰く次第によつては夫迄に及ばねば成らぬやも知らず

然し先づ其事を申すべし、バーチー斷然として云くエメ殿は是迄始終トレッセリアンと通じて居られ候、レスター少しも疑がひ乍らに特更ら微笑して之は汝ちが造り言なるべし汝ちは余が身を案じエメの事を僞はりても倘ほ余をして陛下に反かしめじと謀らうには非ずや何如にしてエメが彼れに通ずるとの出來申すべきや、否な決して僞わりに候はず彼のトレッセリアンが陛下に願書を差出さゞる前私はカムナプレスに於て彼に出會ひたり、出會ひたらば何故打たざりしぞ、固より早速に刀を拔き打ち掛りたるに私し誤まつて足をすべらし倒るゝ間に彼は難なく逃れて候、其外に證據ありや、サン候マイクと申すはトレッセリアンを此時カムナプレスに導き入れしものに候ゆへ私し特更らに之を召抱へたり之に御聞遊ばさるれば確かならん其上トレッセリアン及びマイクが彼の折りカムナプレスに參りたるヿは中々一人二人の存ずるヿに候はず例の旅宿屋の主人迄が精はしく知る所ろに候、然らば何故前に其事を告げ呉れざりし乎、左樣に候其時エメ殿は私しにトレッセリアンに止むを得ず面會したるヿを御話しあり且つ君にも告げらるゝように御談しゆへ定めし君はすでに御承知なるべく之に付て君御自身の御疑念も起るならんと差し扣へたるにて候、レスター侯玆に至て半ば疑ひ乍ら倘ほ沈吟して靜かに云く然しエメの如き高尙なる婦人はよしトレッセリアンに面會したりとも何の妨げもなきにあらずや、バーチー云く然しトレッセリアンの仕打が甚はだ疑はしく候彼のカムナプレスの旅宿屋の主人を見張りに遣ひ常にエメ殿の樣子を探らせたるよし其褒美として右の主人へトレッセリアンが與へたる金の指環あり私しは證據として此處に借り來りぬ而し又トレッセリアンは使を遣つて姿を小間物賣に出立せエメ殿を引出し途にて人の馬を盜む程にして逃れ去り此城中に來つて密そみたり而して城中の何處に密みしかと云へば兼てトレッセリアンに割當てたる八角堂にて玆にて現に共に住まわれたり昨日何人にや彼れが部屋に婦人のあるよし申上たるが今に至て思ひ合はすれば即はちエメ殿にて候ひき。

佳傳

○グラッドストン夫人

當今英國にて第一流の政事家と仰がるゝのみか、公明正大なる大英傑として其名全世界に迄て轟ろき渡る、彼のグラッドストン氏の夫人は、ハワーデン城の主じサー、リチヤード、グ

ライン氏の娘めなるが、幼けなき時より人の長たるの徳あり、而も常に「汝ち若し一事を尤も善く成遂げんと欲せば則ち汝ち自から之を爲せよ」と云へる金言を服膺ありたるが、今日七十六才の老ひの身と爲られたる迄で、遂に之に違ひたるの所行あらずとは申す。

夫人は能く其夫を助けて、何事にもグラッドストン氏が政略の程を贊助せらるゝ中にも、本來道德上社會上の爲に力を盡すを何よりもの樂しみとし、又た其の近くに在る人々の爲に、勞を惜まず介抱せらるゝの風あり。左れば是迄夫人の働らきに由つて成立つたる有益の協會など少からず、其一を申せば、千八百六十六年、グラフ、ハムに於て設けられたる孤兒院の如き是れ也、又た千八百六十二年草綿大不作の節には、夫人晝夜を分たず民の貧苦を救ふに盡力ありけり、而して其の近くに在る百性共の爲には、時に園藝を奬勵し、又は種を撰び、地面を區畫することなどに付て敎へを與へらるゝとも屢々なりと云へり。

夫人は議論に巧みにして、論法甚はだ嚴整なり、左れど亦た甚はだ喜ばしき氣質に富みて、心より親實ある交際を尊とみ、友人と相會して樂しく談話するを非常の愉快とは爲さる、而して夫人が其友を擇ばるゝには、地位貧富素性等を問はず、專ばら其人の道德、及び其人の智識によつて定めらるゝと聞こゆ、英國交際社會の女王にして如此きは、實に有がたきの美德と云ふべし。

左ればグラッドストン氏は、尤も夫人を敬愛し、夫人が社會上道德上に於けるの盡力には、常も亦た力を惜しまず之に贊成して助けを與へらるゝよし、而して氏は全世界中に其の夫人の夫たるに優さつたるの名譽なしと覺悟し、氏が運命氏が好地位も、之に比しては何の價ひもなしと迄でに思ひ居らるゝよし評判す。

夫人の愛顧を蒙むれる歌ひ女某、かつて夫人に告げて、妾は何如なる事を致さば奧樣の御高恩に報ひ得らるべきかと常々心いたく思ひ侍る、と申したるに夫人は半ば笑みて其は容易きことあるをと答へらるゝに、某驚ろきて妾わ風情が身にて御役に立ち候とのありとや何卒敎へ玉ひて御恩の萬一に報ふることを得せしめ玉はれと云ふに、夫人の答へに、

然り、其は他事にあらず即ち汝ちが他人に對して何事をか爲すことにてあるなり、一つの信切なる言葉、少々の人を思ふ助言、僅かなる人を助くる助けにても、たとひ其の多くはあ

らざるとも、汝ぢ若し之を爲さば、之れぞ即はち吾身に爲し呉しくるゝ汝ぢが務めなるべし、然し其は啻に吾身に爲し呉るゝ務のみにあらじ、之れ亦た汝ぢ一身の利益ともなり、亦た天の神に對する汝ぢが忠義ともなるべし。

嗚呼英國にグラッドストン氏あるとを知るものは、之ヿ亦た此の夫人あるとを知らざる可らず。

寄書

○女學雜誌の寄書家諸君に告げ奉る

本誌に金玉の文を寄せらるゝ方いよ〱多けれども何分に大したる御論文にて狹き當欄内に揭ぐると出來ず殘念乍ら其儘ま藏書部に藏め候と廢ばしくに候よりて向后は何卒可成短文にして長くも本紙面一頁(六號字にて)に越ゑざる樣に御認め下され候へば早速に揭載するの榮を得べくと存候但し他の論說叢話批評等に對して御寄書の分は固より此の限にあらず候事。　女學雜誌編輯人謹言

新報

(此欄内自由に轉載を許す)

○詩歌の女仙

新日本の詩人は追々と顏を出さんとす。國民之友に於て此頃ろ論じたるは尤ものの事なれども、之は文章家も、演說家も、畫家も、樂人も、悉く此れ未だ十分なる產物あらざるの日本に於てハ、餘まりに酷なる注文と申すべき也。然し、民友記者の言へる如き詩人の出來らんとハ吾人が深く希望する所ろにして、而して特に云流社會にも其樣なる人の出でんとは、吾人が更に尤も願ふ所ろ也。蓋し高からしむるの詩人は男性に多く、熱からしむるの詩人は女性に多し、故に此の無味乾燥したる新日本に於ては、吾人は特に女性の詩人の多く現ハれんとを切望す。

○兼頭和榮君　女學雜誌の小供談並びに佳傳に對し時々譯文を寄贈ありたる同君は七月十五日に郷里伊豫國長野村歸省中に死去ありき此頃牧師伊勢時雄君が同君を吊したる文基督教新聞二百六十五號にあり其中に云く

學生として君を見る學才を以て云ば秀才と云ふよりも、寧ろ普通の學才ありと云ふべき耳、然れども君ハ誠實の學生なりし也、華かの教場にての手際を現へし最高の點數を得んとするに非ずして、學理を考究し實力を養ふを以て目的とせり、……

蓋し君華美にして世人を眩するの才なし、然れども其希望ハ温乎として以て人を善化す、君死して大名を遺さず、然れどもその學生として、人子として、信徒として、實行したる處の善良ハ君去りて而て益顯ハる、世の幾萬の人生れて無用の人となり、害毒の人となり、人に倦厭せられて死す、而して君ハ潔白純良忠實の生行を遺して去れり、尊父親戚の君を愛惜するハ素よりなり、君を知るもの一人として君を惜まざるなし、

此れ實に君が知己の言にして余も亦た熱心に左樣に申すべし道の爲め學術の爲に惜しむべきは固より余は亦た女學雜誌の爲にあつく之を惜しみ痛く之を懷吊すと云ふ(善治)。

○橫濱フェリス女學校　同校前幹事高根虎松氏は授業を兼て多忙なるに付此度幹事を辭さる中島俊子君一時之に代へらる尙ほ同校新築は已でに着手中なり。

○橫濱二百十二番　共立女學校は五十二坪の新教場增築中に付來月廿四日より授業初まるべく尙其節は入校生四十餘名を募集さるゝ由。

○名古屋淸流女學校　名古屋には從來愛知女學校と云へるあり生徒も百三十人程教育せられ隨分に隆盛の由なるが此度又別に表題の如き女學校を設け專ぱら智德完全の教育を施さんと盡力さるゝよし此頃同校規則書を送附ありたるを見るに同校設立趣旨書の中に左の辭句あり

然りと雖も吾人の深く憂ふる所は彼の似て非なる者なり諺に紫の五色を亂すとかや吾人の女學校を起すは一都會として縣廳あり警察署あり監獄署あり孰れも巍然として雲表を衝くに獨り壯大なる女學校のなきは其地の躰面を缺きたりとの故にあらす吾人は人權を重んじ教育を尊ぶの泰西諸國は女子に教育ありて男子皆之を優待す我邦今や國内を打ち開て外國と對等の權力を得んとするに當り女子に教育なく人之を輕蔑するの風俗ありては條約改正の目的をも達すべからすとの故にも非ず吾人は現時社會の事態俄かに一變して内外の交際日々繁く男女互に交際し夫婦相携へて宴會ヿ出づ是に於てか文字なきの婦人は不釣合なり英語學ばさるべからず洋服着けざるへからずとの故にもあらず吾人は女子の爲めに女子を教育するに在りて其他別に餘念あることなし要するに吾人は正邪善惡を以て其標準となし利害得失は自ら其中に伴ひ來るの結果たるに過ぎずとなす故に吾人の經營する所は或は世間と較々其趣きを異にするが如きとあるべしと雖もろは豫てより吾人の覺悟する所にして吾人不敏なりといへども其の自ら篤く信じ且つ任ずる所實に斯ヿ在りかくて吾人は時弊の外に立ち吾人が敬愛すべき姉妹の心裡に造化の秘め置きたる智德の寶石をして八面玲瓏粲然たる光輝を四邊に發ち以て女權伸張すべく以て女學興起すべく以て一家幸福なるべく以て社會健全なるべく將來善良にして有用なる婦人の玆地より續々輩出せんことを期す是れ發起委員等が謹で此の學校の精神を公けに披露し併せて世の父兄の

安堵して其の最愛なる娘媛を入學せしめんことを希望する所以なり

明治二十一年八月

●發起委員

ミス、ライダ、スミス○ドクトル、シー、エス、ロング○ミセス、フロラ、ロング○山鹿ゆき枝○三枝仙子○山鹿旗之進○三枝光太郎

蓋し如此き覺悟を以て女學校を創立せば其成果の望みあるや必せり吾人は從來名古屋民の女德に就て淺からぬ憂ひを抱けり然るに今ま如此く貢校の續々として彼地に出來るは實に喜ぶべきことと祝す。

○東京美術學校　兼て岡倉覺三其他諸氏が計畫中なる東京美術學校は今度上野教育博物館を借受け專ら本邦固有の美術を敎授する由にて行々は女生徒をも募集すると云ふ又同校の生徒は廣く志願者より採用する筈なれども成るべく各地方の製産組合より適當のものを撰拔し度しとて美術に關する製作の產地へ諭示して研究員を出さしむる都合なりと

○婦人慈善會　は來る十一月十七十八十九の三日間鹿鳴館に於て開からる由なるが右に付出品物等の件にて來月十六日同館に於て發起人、幹事、役員等の總集會を開く筈なりと云ふ。

○福岡英和女學校　目下福岡天神町へ建築中なる英和女學校は本月上旬開校式を執行するの豫定なりと又た同校々主は飛鳥賢次郎氏校長は峯たつ子敎師は西洋人三名日本人五六人なりと云ふ。

○秋田婦人矯風會　同會は去る十六日夜を以て其第一會を秋田英和學校內に於て開かれたり當日の來會者は五十名餘にして中田直鵬氏は發起人に代りて開會の主意を陳べ次に土居通豫氏の演說ありて散會せしは午後九時過ぎなりと今其の目的とする所を聞くに同志の婦女相集り社會の惡風を矯正除却するにありと云ふ。

小供談

○母の愛（其二）

其のオーと云ふた聲は獅子の聲ではあく村人が母親の後を逐ふて探しに參りました聲でありました母親の勇氣前と今と非常に違ひますこの勇氣の斯くも違ひますは必ず道理がなければなりません扨て里人は一度も人の這入し事のなき恐しき山に這入りましたものですから皆恐れ入り縮みまして中には此山に這入りては迚ても命なきもの生なき者を探さんは無益の事歸るに勝る事なしと云ふ人もありましたが中には去りとて棄置くは人情でないと云ふ者がありましたなれど何れへ行きたかサッパリ標がわりませぬゆへ當惑をして居りましたが或る巖の上に血の痕がありました能く〳〵見れば段々と續て居るこれは母親も猛き獸に噛み殺されしに違ひなし折角の事ゆへ何所まで續くか試して見んとて皆一同に死物狂の如き勢で其の血を傳ふて行きますと暫くして彼の岩の上に倒れて居ります母親を見ました皆大に喜びまして近きて見れば其の子をシッカと抱きて居ります外に少しも傷は御坐りませんだが跣足て山を走つたものですから足は痛く傷きて居りました思ふに前の血の痕は其歩みた足痕でありましたろと云はれて能く見ればナル程足痕に違ひない五本の足の痕が見へましたナニハトモアレ先づ其母をかいほう致しまして氣をつけ臺に乘せまして家に連れ歸へりました其後數年を立ちまして後ち聞きましたに其の子か生長致しまして至りて不孝なる者となり果てまして母は始終これを苦に致しまして遂に積て病となり空くなりましたが其の臨死の一言（否死すまで貫きし長き間の母の愛）其の子を改心させました次で其の子妻を持ち子を擧げまして愈々母の愛を覺りました。

社告

賣捌書店の中にて本社の都合に依り雜誌配達差止め候向きも有之候間斯る場合に於ては購讀せらるゝ諸君は直ちに本社へ御注文被下候樣奉願上候

女學雜誌社

生徒募集廣告

●通學生百名寄宿生貳拾名入學ヲ許ス但シ年齡十一才以上ノ者ニ限ル●學科ヲ別テ豫科及ビ本科（各三年ニテ卒業）トス又撰科生ヲ設ケ所定ノ課目中或ル學科ノミヲ撰脩スルヿヲ得セシム○教員ハ重モニ大學校ヲ卒業シタル數名ノ英國婦人ナリ但シ專門學ノ講義ハ帝國大學教授ニ之ヲ依囑ス○束脩ハ之ヲ要セス○普通科ノ授業料ハ毎月金貳圓五拾錢但シ洋琴ヲ學ブ者ハ別ニ金壹圓ヲ納ムベシ○寄宿料ハ毎月金拾五圓但シ外國教師同樣ノ寢食ヲ爲サシム○入學志願ノ者ハ當館事務所ヘ申込ムベシ

麹町區永田町二丁目廿番地女子教育奬勵會

私立 東京女學館

看護婦生徒召募廣告

看護婦生徒拾貳名試驗ノ上募集ス志願ノ者ハ來ル九月三十日迄ニ願書差出スベシ

但年齡廿五歳以上三十歳以下獨身ニシテ身躰強壯ノ者ニ限ル○委細は參院の上聞合はすべし

撿査概目

讀書、本所規則書並ニ翻譯文作文、通常書翰往復算術、加減乘除

明治廿一年八月十五日　東京慈惠醫院看護婦教育所

私立明治女學校生徒募集

學年試驗相濟候に付最下級へ三十名其他欠員有之級に限り入學を許す八月三十日迄に學業履歴書を添へ郵便にて申越さるべし在地方の人々には右書状に據つて入學の出來べきや否やを答述すべし

東京飯田町三丁目卅二番地

明治女學校

開校及入學試驗廣告

●來九月より始まる學年生徒入學試驗九月二三の兩日に執行すべし○他校にて修業せられし方は其校の證書を持參あるべしさすれば試驗を要せずして相當の級に編入すべし

●開校は九月六日を以て始むべし

橫濱山手百七十八番館

明治二十一年八月

フェリス女學校

私立女子文藝學舍生徒募集

○本舍學習ノ科目ハ和洋服裁縫編物挿花點茶和歌英學數學トス○學習科目ノ外修身衛生及家事經濟等ノ講莚ヲ開ク○各科目學習ノ爲メ專門ノ師ヲ聘シテ其指授ヲ依頼ス○九月十一日開校ニ付入學ヲ欲スル姉妹ハ九月五日迄ニ申込マルベシ○規則書入用ノ方ハ郵劵二錢御送附アレ○當分ノ内束脩ヲ要セズ

麹町區中六番町六番地白蓮會ニ於テ

私立 女子文藝學舍

在米の米人學士

にして特に日本の教育に盡力せんと欲するものあり月俸百圓及び家族住居の家を用意せらるゝものあらば條約の上速に渡來あらんとす而して令夫人は音樂に長ず又無報酬にて其人と共に其校に盡力あるべし右學士の學力及び篤行に關しては女學雜誌社員が保證する所なれば日本教育の爲に之を紹介するもの也志あらん方は來談を乞ふ

巖本善治

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

遞信省認可

會員諸君に稟告す

本日午後一時より神田區一ッばしそと高等中學校ない大學かうぎしつに於てそうくわい相ひらき候に付き御家内ともだち御つれだち御操合せ御あつまり相なり度ねがひ上候

當日からし演だいは

（臺所の衛生）長井長義君　（婦人衛生の一斑）櫻井郁次郎君

京橋區日吉町八番地
私立大日本婦人衛生會事務所

府下某學校卒業生にして英漢數簿記の**出教授**を望むものあり望の方は芝今入町廿三番地與水內新發田まで御來談あれ但し自宅教授にても不苦

朝倉山椒入味淋最上醬油製

あけはのたゝみ

滋養品貝類之一等

日數五十日請合
壜詰金十錢ヨリ
曲物入金七錢ヨリ

東京隅田川筋の名物御藏蜆右一名嚶蜆の儀貝類の一等御滋養に相成殊に長品に付發賣仕度事を多年願望の處漸々にして此度新發明致風味專一に精製し發賣仕候間何卒不相變多少共御用向の程一偏に奉願上候尚又佃煮座禪豆其他諸品共御重箱折詰曲物等御好次第精々念入調進奉差上候

淺草茅町　**玉木屋與吉**敬白

發兌

九月。	一日	八日	十五日	廿二日	廿九日
十月。	六日	十三日	二十日	廿七日	
十一月。	三日	十日	十七日	廿四日	
十二月。	一日	八日	十五日	廿二日	廿九日

定價

一册。五錢　郵稅。一錢（但府內無郵稅）
十册。四十八錢郵稅。十錢（同前）
半年分　一圓十七錢　府外は　一圓四十三錢
一年分　二圓卅四錢　府外は　二圓八十六錢

廣告

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を揭ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する每に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分每に十部增の割合と定む

一行（廿七字詰）　一回　前金拾錢
同　三回以上　一割引
同　六回以上　二割引
十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町殷々堂○同芝西久保櫻川町萬春堂○同神田區雉子町團々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新乘物町貢明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本郷區元富士町盛春堂○同本郷區春木町二丁目解明堂○同本郷四丁目文壽堂○横濱住吉町角田早眞○同太田町三丁目萬字堂○同日月堂○同本町六丁目日の出屋○京都四條通小橋西へ入澤集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンボード○大阪備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町石版社○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彦根西內大工町新々堂○相州小田原緑町石壽堂○上州高崎田町煥乎堂○土佐國高知本町三丁目樂園堂○熊本文明堂

明治二十一年八月卅一日印刷
明治二十一年九月一日出版

東京京橋區日吉町八番地
發行所　**女學雜誌社**

編輯兼發行者　東京京橋區日吉町八番地寄留　嚴本善治
印刷者　東京芝區源助町十一番地寄留　森田豐

WOMAN'S MAGAZINE.
"JOGAKU ZASSHI."

Price 5 *sen*. By post *yen* 1.43 six months, *yen* 2.86 per annum, in advance.
Edited and published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B HIYOSHICHŌ, SHINBASHI, Tôkyô, Japan.